



## 日清・日露戦争期の芸妓たちの慈善活動と戦争協力

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪公立大学女性学研究センター 公開日: 2024-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 林, 葉子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/0002000263">http://hdl.handle.net/10466/0002000263</a>

## 第2講演

# 日清・日露戦争期の 芸妓たちの慈善活動と戦争協力

林 葉子

### 1 はじめに

明治期の日本では、女性たちの慈善活動が活発に行われたが、そうした活動に芸妓たちが積極的に携わっていた事実については、これまでほとんど研究が行われてこなかった。女性史研究や社会福祉史研究等の研究領域においてさえも、そのことに言及されず、慈善活動の延長線上で戦争協力が行われた経緯についても、全く知られていない。

本研究は、これまで忘れ去られてきたその芸妓たちの慈善活動が、いかなるものであったのかを明らかにし、実際には活発に行われていた彼女たちの活動を、慈善の歴史の中に位置づけようとするものである。

現在、慈善的な行為については一般に、必ずしも良いイメージを伴う行為として捉えられているとはいえない。むしろ、経済的に豊かで文化資本にも恵まれたエリートが、その余裕ある立場から驕慢な姿勢によって取り組み、救済の対象とする人々に対する共感を欠いたままに行う独りよがりの偽善的行為として、批判的に言及されることも多い。

しかし、本研究で着目する慈善の担い手としての芸妓や娼妓の実態は、そのようなステレオタイプとは大きくかけ離れ、むしろエリートの対極にあると見なされた女性たちであった。当時の日本社会においては、公娼である娼妓はもちろんのこと、芸妓もまた、娼婦的な存在として差別され、蔑視されていた。そのような立場にあった女性たちが、なぜ慈善活動に積極的に取り組むことになったのか、また、彼女たちの慈善活動がどのよう

に戦争協力へと転化していったのかということ、以下、本稿で検証する。

## 2 廃娼論争における伊藤野枝の慈善論とその問題

本稿で芸妓たちの慈善活動の足跡について具体的に明らかにする前に、その足跡が歴史から消され、慈善活動は、その担い手がエリート女性たちばかりであったという誤認や、金持ちの虚栄心を満たすための自己満足だったというようなネガティブなイメージを広めた一つのきっかけとして、女性史研究の中でもしばしば言及されてきた伊藤野枝の慈善論について振り返ってみたい。

その伊藤の論説「傲慢狭量にして不徹底なる日本婦人の公共事業について」（『青鞥』1915年12月）は、後に、それに反論した山川菊栄との「廃娼論争」の発端となるものとして広く知られることになったが、その論争では公娼制度の是非だけでなく慈善についても論じられており、その内容からは、当時、既に芸妓たちの慈善活動が日本社会において不可視化されつつあったことがわかる。

伊藤の論説は、当時の代表的な女性団体である矯風会のメンバーを「傲慢」「狭量」「不徹底」という強い言葉で批判したためにセンセーショナルに受け止められたが、その論説の内容は、100年以上経った現在でも強い影響力を持ち続けている。そして近年では、しばしば、伊藤に対する共感とともに「廃娼論争」における彼女の主張が好意的に紹介されることも多い<sup>1</sup>。

しかし、この伊藤の論説に見られる慈善観は、彼女が、遊廓やその近辺

---

<sup>1</sup> 近年、栗原康による伊藤野枝の評伝『村に火をつけ、白痴になれ』（岩波書店、2016年）が話題を呼び、村山由佳の小説『風よあらしよ』（集英社、2020年）がNHKでドラマ化される等、伊藤野枝に注目が集まっている。栗原は「廃娼論争」において伊藤野枝が山川との論争に「圧勝」したのだと断定しているが（前掲書72頁）、その根拠は示されていない。他方で、伊藤の論説の問題点について、これまで着目されてこなかった史料に基づいて新たな視点から分析する研究も現れている。中谷いずみは、エマ・ゴールドマンの著作が伊藤に与えた影響に着目し、「廃娼論争」における伊藤の主張の背景について詳細に論じている（同『時間に抗う物語——文学・記憶・フェミニズム』青弓社、2023年）。

で生きていた女性たちの実態についてほとんど何も知らなかったことを露呈している。そして彼女が芸妓や娼妓らの慈善活動の歴史を無きものとし、当時のメディアで女性たちの慈善活動が語られる時に典型的に用いられていた娼婦差別の論法を自覚なく踏襲してしまったことによって、その時期の日本の女性解放論の思想的な未熟さが示された事件だったとすることができる。

伊藤はその論説で「慈善」を「中上流階級に属する教養ある多数の婦人連」すなわち「キザにして軽薄な偽善的階級」による活動と位置づけて<sup>2</sup>、「虚栄心」や見せかけの「外見」のためのものであり、内容がなく、自分自身と他者とを「侮蔑する」「最も傲慢な態度」によるものだと主張している<sup>3</sup>。しかし後述するように、慈善活動は、中産階級や上流階級の女性たちだけでなく、むしろ芸妓や娼妓らこそが熱心に取り組み、実績をあげてきた領域であった。(芸妓や娼妓等も含め)女性たちの慈善活動に対して、虚栄心に基づく偽善者的行動にすぎないという論法によって否定するのは、当時の典型的な女性差別の一パターンである。

そのような偏見は、すでに明治初期の新聞にも現れており、その初期の一例として、ある一人の娼妓の慈善行為がどのように新聞で報じられていたかを紹介したい。

1879年、貧民救済のために「貧民学校」が開校されることになり、市子という名の娼妓が、その開校を支援しようとして株を二株購入した。娼妓・市子は、ただ株を購入するだけではなく、歌一首を添えて、その開校を讃えて応援しようとした。この市子の行為をめぐって、ある人が新聞社に、市子について「淫奔社会に珍らしき女なり」と評する投書をした。つまりそれは、遊廓という「淫奔社会」に生きる女性でありながらも慈善的行為を行うとは殊勝な心がけであるといった趣旨の投書であった。この投書は、娼妓は慈善行為からは縁遠い〈卑しい者〉だと見なしている点において差別的であるものの、市子の慈善的行為そのものについては称賛する姿勢を

<sup>2</sup> 伊藤野枝「傲慢狭量にして不徹底なる日本婦人の公共事業について」『青鞥』第5巻第11号、1915年12月。

<sup>3</sup> 同前。

示し、彼女を肯定的に捉えるものであったといえよう。そしてその記事を執筆した新聞記者は、市子の行為について二つのコメントを記している。一つ目は、(娼妓として前借金を抱えた)市子は、貧民を助けられるような立場ではないのだから、そんな慈善活動をするくらいならば早く自分自身が遊廓から脱出するための金策をすべきだということ、もう一つは、市子が娼妓という立場であるにもかかわらず慈善活動をしたのは「名を好むと云はざるを得ず」、つまり、市子はただ名声を得たいがために偽善的行為を行ったのだらうと批判したのだった<sup>4</sup>。

この報道の仕方には、当時の女性たちの慈善活動に対する、幾重にも重なる偏見が示されている。娼妓・市子が貧民を助けようと行動したことは身の程知らずの珍しい行為で、本来ならば「淫奔社会」に生きる女性たちはそのような慈善行為は行わないだろうとの前提のもとに、その慈善行為は動機が不純で、自分の名声を得ることが真の目的だと決めつけられたのである。こうして、慈善活動は経済的に恵まれた階級の人々だけの行為であるとの認識や、それを女性たちが行う際には、虚栄心の強さが背景としてあるに違いないとの偏見が広まっていたことがわかる。

伊藤が後に廃娼論争で展開した慈善論は、このような新聞記事と同様の偏見を土台にしており、その主張は、当時としても何ら新しいものではなかった。そして今、伊藤のような女性解放論者でさえもが共有してしまっていたその偏見を超えて、芸妓らを主体とした慈善活動が実際にどのように行われ、それが当時の時代背景とどのように絡みあって展開されていったのかを、史料に基づき検証することが必要なのである。

### 3 芸妓たちの活躍の場としての慈善演芸会

本稿では、芸妓と娼妓の慈善活動を共に視野に入れているが、慈善活動をより主体的に担った芸妓の活動に特に焦点を当てて論じたい。

明治期の芸妓は現代の「芸者」に類する稼業であるが、法的な立場は、

---

<sup>4</sup> 『朝日新聞』1879年10月24日3面。

当時と今とは大きく異なる。明治期には、どのような存在を芸妓や娼妓と見なすかについて定めた「取締規則」があり、その「取締規則」は府県単位で発布されることもあれば、政府から発布されることもあったが、廃娼県のような一部の例外を除き、各府県の「取締規則」に定められた芸妓や娼妓の定義は似通っていた。

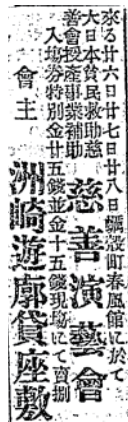
芸妓の定義について、ここでは一例として、日清・日露戦争期の広島県の「芸妓取締規則」（1885年）の内容を紹介する。その第一条には「芸妓トハ宴席ニ於テ歌舞音曲ノ営業ヲ為ス婦女ヲ云フ」と記されている。つまり芸妓の本業は「歌舞音曲ノ営業」であり、芸妓は女性に限られていた。第二条には、芸妓は警察署に届けを出して「鑑札」を得なければならないと書かれてある。つまり芸妓になるのは許可制であって、その営業は警察に管理されており、女性たちはその許可を得ずに勝手に芸妓を名乗ることはできなかった。第九条には、「業者ハ遊客ヲ自宅ニ入ル、ヲ得ス但料理店又ハ貸座敷内ニ居住スル者ハ此限ニアラス」と記されている。「遊客」を自宅に入れてはならないとここで定められているのは芸妓の売春を防ぐためである。またこの記述からは、芸妓の中には料理店や遊廊の中に住んでいる人もいればそうでない人もいることがわかる。これは娼妓と大きく異なる点で、芸妓稼業も警察の管理下にあったものの、娼妓と比較し、住居についての自由度は高かった。第十二条には、「密売淫ノ処分ヲ受ケタルモノハ営業ヲ停止シ」と定められている。それは二つのことを意味しており、芸妓の売春は「密売淫」すなわち違法な売春であるということと、芸妓らには常にそのような違法な売春を行うかもしれないという疑いの目が向けられていたということである。

明治期において、芸妓の人気は高く、しばしばその写真は絵葉書になり、広く国内外に流通していた。【図1】は、そのような絵葉書のうちの一枚である。その下部に「演藝」（演芸）と記されているように、芸妓たちが最も得意とする本業の「歌舞音曲ノ営業」とは、歌い、踊り、三味線等の楽器を演奏するこの演芸のことであった。





【図1】芸妓たちの「演藝」写真の絵葉書（筆者私物）



【図2】慈善演芸会  
 広告『東京朝日新聞』  
 1894年4月25日6面

そして芸妓たちは、その演芸という特技を活かして、慈善演芸会と呼ばれる催しを次々に開催した。そこで得た収入を生活に困窮する人々のために寄付するというのが、この時期の芸妓たちの典型的な慈善のスタイルである。各地域の遊廓が、他団体の慈善事業を補助する形で慈善演芸会による収入を寄付することもあった。【図2】はそのような催しの広告である。



【図3】 【図4】 慈善演芸会（上山小学校貧困児童救済）の絵葉書（筆者私物）

こうした芸妓らの慈善演芸会とは別に、上流や中流の階層の女性たちも慈善演芸会や慈善音楽会などを催していた。しかし普段から職業的に演芸

に携わっている芸妓たちと比較すれば、上流や中流の階層の女性たちは、自らのパフォーマンスによって収入を得ようとするよりも、バザーのような物品販売の収入による寄付活動を行うことが多かったようである。ただし、そのように物品販売を行う場合も、常日頃から接待に慣れている芸妓らが売り子となった方が、上流階級の女性たちが売り子となるよりも売上が上がっていると報じられることがあった<sup>5</sup>。

そのような状況のもとで、慈善活動は芸妓たちの活躍の場となり、とりわけ慈善演芸会は一時期、芸妓らの独擅場となった。【図3】【図4】の撮影時期は不明であるが、そのキャプションから、貧困児童救済活動として慈善演芸会が行われていたことがわかる。彼女たちは、困窮する人々、特に親を失って貧窮する児童の救済等のために慈善演芸会を開催し、寄付を行っていたのである。

#### 4 芸妓たちの慈善活動と戦争協力

日清・日露戦争前後の芸妓たちの慈善活動の展開を捉えようとするにあたっては、特に、以下の三つの時期に分けて、その活動の変化に注目したい。

- (1) 1880年代から1894年まで：寄付中心の慈善活動から慈善演芸会の本格的実施へ
- (2) 1894年から1900年代初頭まで：慈善活動の一部としての戦争協力とその余波
- (3) 1900年代初頭以降：慈善活動に参加する女性たちの序列化

上記(1)の変化は、濃尾大震災（1891年10月）が端緒となっている。芸妓等の慈善演芸会は、この濃尾大震災の後に盛んになり、本格化していった。

---

<sup>5</sup> 「慈善演劇の景況」『東京朝日新聞』1893年6月28日3面。この記事は同月25～27日開催の東京府養育院慈善演劇について報じるもので、その観覧者は、井上文相夫人、高島子爵夫人、渋沢栄一夫妻、大倉喜八郎氏夫人、有栖川若宮妃ほか、1600人以上いたとされる。その会場で行われた物品販売について、この記事は、「令夫人交るがはる出張して商ひに従事したれども昨年各所の唄ひ女を駆上げて手代役をさせたるに比ぶれば如何しても売れ高少なく（中略）是だから本妻よりは外妾の方が巾をする筈なりと或る通はいへり」と論じている。



そのようにして芸妓らの間で慈善文化が根づきつつあった時期に日清戦争が起き、慈善演芸会そのものが軍事化されていった。そもそも明治期以降の遊廓は日本軍の兵士たちの性病管理がその設置の最大の目的であったために、遊廓と軍隊はもともと近い関係にあり、そうした背景のもとに慈善演芸会の収入が戦死者遺族の救済のために寄付されたり、恤兵献金として使われたりした。そうした献金は多くの場合、強制されたのではなく、芸妓らが主体的かつ積極的に行った。

日露戦争前後の時期になると、日清戦争の頃よりも、女性たちの戦争協力活動は組織化が進んでいた。その組織化の過程で、芸妓のように娼婦的とみなされた女性たちは、それまでの慈善活動の実績は正当に評価されることなく、女性たちのヒエラルキーの最下層に位置づけられることになった。

前述の伊藤野枝の慈善論は1915年に発表され、それは日露戦争の終結からまだ10年しか経っていない時期のことだったが、無産階級の女性の声を代表するはずのアナキストでありフェミニストであった伊藤野枝でさえもそれを知らなかったほどに、芸妓たちの慈善活動における活躍は、目立たないものとなっていたのである。

以下では、史料を紹介しながら、上記の日清・日露戦争前後の時期における慈善活動の変質について概説したい。

#### (1) 寄付中心の慈善活動から慈善演芸会の本格的実施へ（1880年代から1894年まで）

1880年代には既に女性たちの慈善活動が新聞で報じられているが、それらの多くは、貧民や被災民の救済を目的とする寄付活動だった。たとえば、1882年に神戸の代言人の妻ら15名の女性たちによって設立された「慈善懇親会」は、貧者救済の寄付を行うものであり<sup>6</sup>、1884年に鹿鳴館で発会した「婦人慈善会」も「手製の諸物品を陳列」して販売し、その売上金を寄付することで「窮民を救恤」する活動だった<sup>7</sup>。

<sup>6</sup> 『朝日新聞』1882年2月1日2面。

<sup>7</sup> 『朝日新聞』1884年6月20日1面。

芸妓らも、困窮する人々の救済を目的とする寄付活動に参加している。1885年7月に東京朝日新聞が行った「出水遭難者」のための義捐金募集の記録の中には、義捐者として、ある芸妓屋の名前が記されている<sup>8</sup>。1887年には、吉原遊廓の芸妓らが大火の被災者の救済のために寄付をして、翌年にそれが表彰され、木盃が与えられた<sup>9</sup>。1888年末には、京都の芸妓らが女紅場で作った品を出品・販売する慈善会を計画したことが報じられている<sup>10</sup>。

単に寄付を行うだけでなく、その寄付の資金作りのために様々なパフォーマンスが行われるようになったのも、この頃である。1889年の秋には、前述の矯風会が「慈善音楽会」を開催したが<sup>11</sup>、同じ頃、柳橋の芸妓らは水害罹災者救済のために「義捐演劇<sup>しばみ</sup>」を開催している<sup>12</sup>。中産階級のメンバーが中心となった矯風会がピアノ等の洋楽器の演奏や演説や能楽などを行ったのに対して、芸妓らが芝居や演芸を行ったという対比が興味深い。芝居や演芸は、貧しい階層の出身の女性たちにも取り組みやすい慈善活動であった。慈善演芸会は好評だったため、慈善に名を借りて、金銭だけが目当ての興行が行われることもあったようである<sup>13</sup>。

そうした慈善活動は、1891年10月の濃尾大震災が一つのきっかけとなって、本格化した。慈善活動は、慈善ブームと表現しうるような活況を呈した。それは、その震災の翌月に、慈善に関する興行が免税されたことも一つの要因だったと考えられる<sup>14</sup>。遊廓の関係者も、この震災の罹災者救済活動に加わろうとした。1891年11月には、南千住や北千住、横浜の貸座敷一同がその罹災者に義捐金を送る計画を立て<sup>15</sup>、翌月には洲崎の幫間連が慈善芝居を行っている<sup>16</sup>。

<sup>8</sup> 「義金」『朝日新聞』1885年7月10日2面。

<sup>9</sup> 「木盃の置所ろ」『東京朝日新聞』1888年8月3日3面。

<sup>10</sup> 「芸妓慈善会」『東京朝日新聞』1888年12月11日4面。

<sup>11</sup> 「慈善音楽会」『東京朝日新聞』1889年9月28日1面。

<sup>12</sup> 「芸妓の義捐演劇」『東京朝日新聞』1889年10月22日4面。

<sup>13</sup> 「福田会慈善演芸会」『東京朝日新聞』1891年6月5日4面。

<sup>14</sup> 「慈善に関する興行物の免税」『東京朝日新聞』1891年11月15日2面。

<sup>15</sup> 「千住の義捐金おじゃんとする」『東京朝日新聞』1891年11月18日3面。

<sup>16</sup> 「洲崎幫間連慈善芝居」『東京朝日新聞』1891年12月8日3面。

そのような慈善活動の急速な活発化を受けて、そうした活動を行う者の中に金儲けが目的の偽物の慈善者がいるのではないかと疑う人も現れ、慈善活動そのものの動機が不純なのではないかと批判する報道も見られた。ある新聞記事は、この時期の慈善活動の活況を、「慈善といふ二字を濫用してさまざまの痴気を盡す事が流行る時節」と表現した<sup>17</sup>。あまりに慈善演芸会が流行しているので、「あれも慈善、これも慈善、何でも素人の演藝に慈善といふ二字が無いと、洋服を着て帽子を忘れたやうな気味あり<sup>18</sup>」〔読点筆者〕と揶揄する者もいた。

特に、芸妓の慈善活動に対しては厳しい目が向けられた。彼女たちの慈善芝居は真剣なものとは受けとめられず、「道楽に芝居をしながら慈善と名をつけ<sup>19</sup>」ているだけだと批判されることもあった。ある記者は、芸妓が慈善のために「踊狂って」も最後まで上手くいっただめしなどないのだと論じ、「慈善も身の程を考へる事サ」と軽侮した<sup>20</sup>。こうして、芸妓の慈善活動は見せかけだけの偽善者的行動ではないかと疑いをかけたり、身の程知らずの分不相応な行動だと批判したりすることは、既にこの最も初期の頃からあったのである。

## (2) 慈善活動の一部としての戦争協力とその余波（1894年から1900年代初頭まで）

日清戦争が始まると、芸妓たちは次々に兵士たちに「慰労献金」等と呼ばれる寄付を行い、その資金作りのための慈善演芸会を開催した。そのような日清戦争の軍資提供や、兵士や戦死者遺族を慰労する活動も「慈善演芸会」等と名づけられ、それまでの慈善活動の延長線上に芸妓らの戦争協力が位置づけられたのである。

戦争協力への積極的な姿勢は、芸妓だけでなく娼妓たちにも同様に見ら

<sup>17</sup> 「慈善唄ひ女の泣言」『東京朝日新聞』1892年9月14日3面。

<sup>18</sup> 「柳橋唄ひ女慈善芝居の遊説」『東京朝日新聞』1892年9月24日3面。引用文中の句読点は筆者が加筆した。

<sup>19</sup> 「慈善唄ひ女」『東京朝日新聞』1892年8月3日3面。

<sup>20</sup> 前掲「慈善唄ひ女の泣言」。

れた。また、その寄付は、一人一人の女性が単独で行うだけでなく、各遊廓が他と献金額を競いあうようにして集団で行っていたことも、当時の新聞記事から確認できる。それは兵士らに対する直接的な寄付である場合もあれば、亡くなった兵士の遺族や病院への寄付という形をとることもあった。金銭だけでなく白木綿や手ぬぐい等の物品が寄付されることもあった。

そのような寄付が強いられたものではなく自発的なものであったことは、日清戦争勃発直後の次のような新聞記事から推察することができる。

新橋唄ひ女の大奮発 色男の手紙を投捨て先づ號外を讀まうと云ふまで花柳社会の人気すら自から振ひたるは今度の日清事件なり（中略）応分の金を集めて在韓兵に贈つたなら国恩の万分が一を報ずる事も出来やうかと同所の相談役江戸家が發起となり一昨日重立たる唄ひ女のみを揚箱へ呼んで相談するやう何だつて日本ぐれへ剛い国は無へと見えて豊島の船戦に敵の軍艦を生捕るなんて五体がぞくぞくする程嬉しいぢやア無へか其処で野生達も一人前一円以上の金を集め少なくとも二百円ばかり拵へて兵隊さんの慰勞金に差出さうと云ふのだが是にやア否やはありますめへと力瘤の五六十も現はすと（後略）<sup>21</sup>

ここで「唄ひ女」と記されているのは、芸妓のことである。新橋は代表的な花街の一つであるが、その新橋の芸妓たちが日清戦争開戦の報に接して奮起し、自ら進んで軍に献金した様子が、この記事には描かれている。

芸妓たちがこの日清戦争にどれくらい夢中になっていたかといえ、いつもは待ち望んでいる情夫（「色男」）の手紙もそっちのけで、日清戦争の戦況を報じた新聞の号外を真っ先に読むほどであったという。芸妓の置屋が、芸妓らから寄付金を集めて在韓の日本兵にそれを贈れば自分たちも「国恩」に報いることができるのではないかと芸妓らに相談したところ、彼女たちは、日本軍が敵の軍艦を生け捕りにできれば体がぞくぞくするほど嬉

<sup>21</sup> 「新橋唄ひ女の大奮発」『東京朝日新聞』1894年7月31日3面。

しいとって、次々に献金したというのである。

そしてそのような新橋の芸妓たちの好戦的な姿勢に接して、周囲の人々は、次のように評した。

流石は新橋の唄ひ女だ愛国心と云ふものに富んで居るから成らうことなら唄ひ女軍隊を組織して朝鮮へ出兵させたいものだ美しい兵士が並ぶ日には支那兵の目尻が下つて狙ひが定まらず莞爾々々して殺されながらコレサ痛へよと涎れを垂して敗戦すること疑ひなしと盛んに名策を説く者もありとぞ<sup>22</sup>〔傍点筆者〕

「愛国心」に富む芸妓たちだけで構成された軍隊（「唄ひ女軍隊」）を組織して朝鮮へ出兵させれば、中国の兵士たちは、その美貌に惑わされて殺され、敗戦するに違いない、と説く者がいたという。そのように、芸妓らの熱心な軍事献金を「唄ひ女軍隊」や「美しい兵士」というレトリックを用いて賞賛することによって、いっそう彼女たちを戦争協力へと駆り立てていった。

当時、芸妓らも歌っていたであろう端唄の歌詞には、下記のようなものがある。

従軍に、いのち惜まぬ日本軍、敵の伏兵先づ散らす、帆かけた尻が見ゆるぞへ、アレ敵が泣く、敵が泣く、馬鹿げた大将があるわいな<sup>23</sup>

このように芸妓を含む日本の庶民らは、自分たちより弱い立場におかれた中国の人々を貶めることによって、日頃の鬱憤を晴らしていた。

芸妓らは一般に、人気がありながらも、娼婦的な存在として蔑視されていたので、その自分たちの悪いイメージを払拭して社会的な承認を得ることを強く欲していた。その彼女たちにとって、日本軍を応援することで愛

<sup>22</sup> 同前。

<sup>23</sup> 松洒舎みどり編『日清事件はうたかへ唄』中村鍾美堂、1895年、2頁。

国的な存在と見なされ、女でありながらも「軍隊」や「兵士」にたとえられていくのは喜ばしいことだったのである。

別の新聞記事は、芸妓らの慈善活動の動機について、次のように説明している。

横浜唄ひ女的美拳 女に五障三従の罪あれば之に迷ふ者必ず苦情難洩の辛苦を免かれず況して唄ひ女とも有らうもの人を零落さするを商売にする程なれば後世の報いも恐ろしと横浜常磐町の美形一同は善根功德を施す為め一昨廿四日二十円五十銭の金を集め征台軍慰労会資金として市役所内の同会へ義捐したり<sup>24</sup>〔傍点筆者〕

つまり、芸妓たちが抱えていた劣等感、彼女たちが兵士になれない「女」であり、芸妓という「卑賤の身」であることをめぐる劣等感であった。「女」は生まれながらにして「五障三従の罪」を負い、芸妓は「人を零落」させる商売であるという仏教の一解釈に基づく差別的な女性観を内面化し、「後世の報い」を受けることを恐れ、「善根功德を施す為め」に軍隊に献金したのだという。しかし、そのように「女」や「芸妓」である自分自身を卑しい者と捉えて、その劣等感に駆られて行った彼女たちの慈善活動や戦争協力は、彼女たちの社会的な地位の低さを、わずかに幾分か埋め合わせるという程度の評価にしか繋がらなかった。

ある芸妓見習いの14歳の女性は、もしも自分が男ならば「兵隊になつて出陣とやらを倣やうもの」だが、「女では仕方が無いから」、せめて何か、兵士たちに役立つことを考えようと思ひ立ち、ちりめん布でお守りを手作りして、来宿の軍人に分け与えようとしたのだという<sup>25</sup>。しかし、彼女がそのようにしたところで、それが戦地へ行くことの代用になると社会的に認められたわけではなかった。また、吉原遊廓の芸妓たち136名が陸軍に献金した際には、その行為は「卑賤の身にして猶国恩の万分の一に報ぜん

<sup>24</sup> 「横浜唄ひ女的美拳」『東京朝日新聞』1895年9月26日3面。

<sup>25</sup> 「小唄ひ女の守護袋」『東京朝日新聞』1894年8月7日3面。

と」していると報じられたが<sup>26</sup>、そこには〈卑しい者〉たちでさえも少しは国のために役に立とうとしているといった差別的なニュアンスが込められており、「功德」のためにと慈善活動をしても、芸妓らに対する差別そのものは無くならなかったのである。

日清戦争前から盛んに行われていた芸妓らの慈善活動の一つの転機は、東京市会で決まった遊廓に対する1899年4月からの増税策である。賦金が倍額以上になったこの大増税をきっかけに、新吉原遊廓では、慈善会等への寄付を一切取りやめる申し合わせをした。その後も、浅草区役所の役人が新吉原遊廓に東京養育院のための慈善会開催の協力を求め、同遊廓の取締役がこれを固辞するといったことが複数回にわたって繰り返されたことが報じられている<sup>27</sup>。そのような報道からは、この時期、公的機関までもが遊廓関係者の慈善活動から得られる金銭的利益に、ある程度依存していたということがわかる。

### (3) 慈善活動に参加する女性たちの序列化（1900年代初頭以降）

1901年2月に奥村五百子らが愛国婦人会を創立すると、女性たちの戦争支援の活動の組織化が進み、その組織の中核部は権威化されていった。その権威の象徴は皇室であり、皇室から慈善活動等に対して与えられる御下賜金であった。皇室が慈善活動に関与し、その活動が神聖なものとなされていくことによって、日本社会における皇室を頂点に置いた女性たちのヒエラルキーが、戦争支援活動の在り方にも反映されることになった。

その過程で、芸妓たちが戦争支援活動に表立って参加することを批判的に見る人々も現れた。芸妓や娼妓らは、慈善活動とその延長線上に位置づけられた戦争支援活動において、それまで最も便利に利用されてきた存在でありながら、新たな女性たちの序列においては劣位に置かれたため、不満を募らせていった。

日清戦争の時と同じく、日露戦争の開戦にあたって、芸妓や娼妓らの

<sup>26</sup> 「献金のかずかず」『東京朝日新聞』1894年8月10日3面。

<sup>27</sup> 「吉原の増税歎」『東京朝日新聞』1899年4月10日5面。



多くは、その戦争と日本軍とを強く支持した。日露戦争開戦直後の新聞には、芸妓や娼妓らが献金したことが、しばしば報じられている。金銭だけでなく、手編みの靴下等を陸海軍に送った娼妓もいたという<sup>28</sup>。芸妓や娼妓らは日露戦争支援の資金作りのためにも慈善演芸会を行った。

皇室も慈善演芸会に関与した。1904年9月、女性教育者らが集って「戦争の影響として増加せる失業者の爲め並に清韓地方及び北米各地へ渡航奨励の爲め」に慈善演芸会を開催することになったが、この開催の資金として、宮内省から御下賜金があったと報じられている<sup>29</sup>。

そのような背景のもとに、慈善演芸会は「品性高潔なる婦人」たちのものへと再定位されていった。1905年11月には、芝増上寺における慈善演芸会の開催をめぐる、余興のために芸妓らをその演芸会に出演させることについて、愛国婦人会芝支部の「貴婦人」らが「大に感情を損じ」、余興が足りないからといって芸妓を招くのは「会の墮落を暴露するに等しきもの」だと難色を示したのだという。特にこの芸妓の招聘が問題化されたのは、それが神聖なる「霊場」である増上寺で行われるという点にあった<sup>30</sup>。

こうして慈善演芸会は、女性たちの社会的な評価をめぐる競い合いの場になった。異なる社会階層の人々の間だけでなく、同じ階層の女性たちの間でも、待遇をめぐる争いが生じた。慈善演芸会で中心的な役割を担えるか否かということが、女性たちの社会的序列の反映と見なされたため、その序列の中で高い位置につこうとする者たちによる争いが生じたのである。そのような中で、もともとは慈善演芸会に多くの活躍の場を得ていた芸妓たちには、大きなフラストレーションが生じることになった。一例を挙げれば、1906年2月、日露戦争後の慈善演芸会での自分たちの戦争協力の貢献が正しく評価されなかったとして、向島の芸妓たちは、次のように本所の区役所に訴えたという。

<sup>28</sup> 「神風楼娼妓の献品献金」『東京朝日新聞』1904年7月3日5面。

<sup>29</sup> 「慈善演芸会に御下賜金」『東京朝日新聞』1904年9月17日4面。

<sup>30</sup> 「婦人界 なまぐさ」『東京朝日新聞』1905年11月23日6面。

一昨年日露の開戦端開くるや区役所よりはソレ慈善会、ソレ恤兵金と様々の勧誘あり自分達は芸者をこそ稼業としたれ身は日本人の端くれゆゑ及ぶ限りの出金をなし一意に奉公を勤めたにも拘はらず市の催しの歓迎会には場末とて侮られてか更にお召の御沙汰なく他土地の芸者連は皆晴の場所に晴を飾り凱旋の軍人さん方と親しく詞を交して居るのに独り此の土地ばかりを除者にし一人も出席させぬとは余りな依怙<sup>ひいき</sup>鼠<sup>ねずみ</sup>貞<sup>まこと</sup><sup>31</sup>（後略）

こうした記事からわかるのは、慈善活動に勤しむ芸妓たちは、その活動を通じた社会的承認を強く求めていたということである。慈善演芸会という「晴の場所」で、英雄として帰国した「凱旋の軍人さん方と親しく詞を交し」たいという思いや、自分たちの軍事献金等の貢献について社会的に評価されたいという思いが、彼女たちを戦争協力へと突き動かしていた。「芸者をこそ稼業とし」ていても「身は日本人の端くれ」という表現には、卑しいと蔑視される芸妓稼業をしていても日本社会の一員として認められたいという強い思いが表れている。普段、娼婦的存在として差別され続けているからこそ、同じ国民として承認されることを強く求めたのであろう。

しかし、そのような彼女たちの「愛国心」は、ただ社会的に評価されないだけでなく、暴力的に否定されることもあった。娼婦的であると見なされれば、「愛国心」さえも、分不相応と見なされるのである。ある娼妓などは、自分のところに通いつめて散財している客に対して、遊廓へ3回来るのを2回に減らしてそのお金を日露戦争支援のために軍へ献金してはどうかと提案したところ、その客に「生意気なことを吐すな」と器物で何度も殴りつけられ、休業10日の重傷を負わされることになった<sup>32</sup>。彼女たちの国民として認められたいという思いは、そのように言葉だけでなく身体的な暴力を伴う形で退けられることもあったのである。

<sup>31</sup> 「向島芸妓の大不平」『東京朝日新聞』1906年2月22日6面。

<sup>32</sup> 「娼妓客を諫めて擲らる」『東京朝日新聞』1904年3月12日5面。

## 5 おわりに——芸妓たちの慈善活動と戦争協力にみる主体性の問題

本稿では、これまでほとんど顧みられることのなかった芸妓たちの慈善活動の歴史を掘り起こすことによって、女性たちの戦争協力の〈主体性〉がどのように引き出されたのかを検証した。

慈善演芸会という日常の活動が、そのまま非日常の戦争協力活動へと転化していき、日常と非日常が連続する形で軍事主義が浸透していったという点が重要である。芸妓たちを「慈善」へと駆り立てていった社会構造そのものは、戦争の前後でも大きく変化することはなく、その強固で女性差別的な社会構造を背景として、日常生活の延長線上に〈主体的〉な戦争支援が行われたのだった。

これまで、女性の慈善活動の歴史については、金銭的に恵まれた社会的エリートの歴史であると捉えられることが多かったが、本稿が明らかにしたのは、エリート女性ばかりではなく、むしろ社会の下層に位置づけられていた芸妓や娼妓こそが率先して慈善活動を担ってきたという事実である。

芸妓や娼妓は、当時「卑賤の身」として蔑視されていたが、そのような下層に位置づけられた女性たちが慈善演芸会に積極的に取り組むことになったのは、決して偶然の出来事ではなかった。たしかに芸妓たちは、もともと演芸を稼業としており、それによって収入を得るのを得意としていたが、そのような技術や、経済的な利益だけが問題だったのではなく、慈善活動によって得られるはずの社会的承認こそが、重要な意味を持っていたのである。

芸妓らの慈善活動への熱意の背後には、彼女たちの劣等感や罪悪感があった。特に戦時中には、女性であるがゆえに兵士になれないという劣等感と、芸妓として男性たちに多くの金銭を浪費させていることへの罪悪感が強まった。それらの代償として、彼女たちは慈善演芸会に熱心に取り組む、貧民や罹災民や兵士のために寄付をしたのである。

そうした慈善活動には、たしかに芸妓らの〈主体性〉が見られたが、それが引き出された背後には女性差別があり、娼婦差別があった。戦争を正

当化し、兵士として戦うことが立派であるという価値観が強固だったからこそ、兵士になれない女性は劣ったものと見なされたのであり、天皇を頂点とする家父長制のもとで婚外の性を卑しいものと見なす価値観があったからこそ、芸妓であることへの罪悪感が生じたのである。しかし、芸妓たちの多くは、そのような社会構造を変えて差別問題を解決しようとするのではなく、むしろ、その自分たちを苦しめてきた社会構造の強化につながる軍隊支援のために献金し、帝国のヒエラルキーそのものを不問にしたままで、その序列の中で自分だけが少しでも高い位置につこうとして競いあった。そして結局のところ、芸妓たちが望んだ社会的地位向上の夢は、そのような慈善活動によっては、叶えられなかったのである。

\*本研究は、JSPS科研費JP 22K12655の助成を受けたものである。